

ボストン日本語事情

酒 井 浩 志

8月31日早朝、ローガンエアポートまで車で送ってくれたヤコブと最後の握手を交わし機上の人となった。充実した2年間を思い返しながらかボストンの高層ビル群を窓から目で追った。

MITのMaterials Processing Centerに客員研究員として留学した私は、たくさんの友人を得たがその多くは日本語を勉強しているか日本に興味がある人達だった。ここではボストンの日本語事情をお伝えしようと思う。

Language Exchange

だれでもアメリカに2年もいれば英語がぺらぺらになると思うかもしれないが実はそんなに簡単なことではない。特に私のように研究室にこもって1日中1人で実験している技術系の研究者には、大学で英語を話すチャンスは思ったより少ない。これは知り合った日本人の研究員の共通の悩みのようなだった。極端なことをいえば、自分から話す努力をしなければ英語を一言も使わなくても生活できてしまう。これでは、日本の会社で研究するのと変わらなくなってしまう、と思いはじめて2週間程した或る日、Language Exchange Partnerを紹介するというMITの制度を知り登録した。これは自分の母国語を相手に教える代わりに、相手の母国語を教わるというものである。幸い私はすぐにマリオというカナダ人のパートナーを得たが、彼の母国語は実はフランス語でさらに学生ではなく会社員であった。フレンチカナディアンとしてのプライドをもつ彼はアメリカをやや斜め

に見るところがあったが、興味は広く、話題はスポーツから政治にまで及んだ。英語が母国語ではないゆえに、英語を学ぶ先輩として彼からはたくさんのことを学んだ。中でも毎週会う度に教えてもらった口語的表現、アメリカのスラングは私の英会話の進歩の大きな力となった。彼の方は日本語版の童話と、その童話のフランス語版を図書館から借りてきて読み仮名をふり、訳していくという熱心さであった。この制度を通して家内も先出のヤコブなど数人のパートナーと出会った。こういう人達を家に呼び、話をするのも私達の楽しみの一つだった。言葉を学びたいという共通の目的があるせいか気楽にわからない表現を聞いたり、間違いを直してもらえたりでき、この点でも特別な友人達であった。

生涯教育

ボストンには夜間大学、エクステンションスクールあるいはアダルトエジュケーションセンターがたくさんあり、主婦や社会人が趣味的なものから専門的なことまで数多くの講座を受講している。友人のMITジャバンプログラムの秘書のコーネリアは、もう50才近いが去年からここで日本語の勉強をはじめた。マリオも退社後、哲学講座、ワイン講座を受けている。また一度社会人になってから自分の能力を高めるため大学に戻ってくる人も多い。実際MITのなかにもずいぶん年を取った大学院生がいる。こういう人達を見ると、時間の使い方のうまさ、自分を常に高めようと努力する姿勢に感心させられてしまう。そんな中にいると自分も何かに挑戦してみようという気持ちが沸いてくるから不思議なものである。

1986 昭和電工株式会社入社

1991 8月～1993 8月 MIT 客員研究員

(昭和59年3月応用化学科卒・第34回)

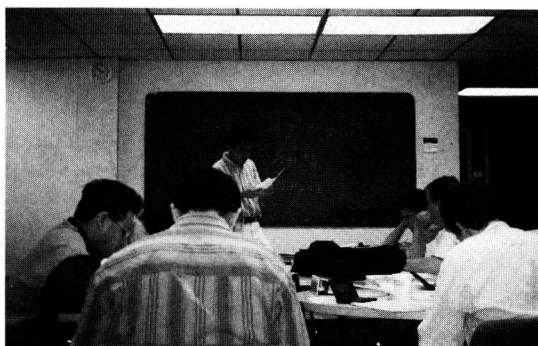
(昭和61年大学院博士前期課程修了)

ジャパニーズランチテーブル

MITにはMIT ジャパンプログラム（この組織を通し毎年約50名の学生が日本の企業や大学に留学している）とジャパニーズワイズグループが協力してジャパニーズランチテーブルというのを週1回おこなっている。これは日本語を学んでいるか又は日本に興味のある学生と日本人が懇談する場である。ここで出会ったたくさんの友人の中の一人、中国人のリージェンはPh. D. コースの学生である。アメリカの大学の違うところは、Ph. D. コースの学生が専門のほかにマイナーとして何か単位を取らなければならないところである。MITではマイナーとして日本語のクラスを取る学生が結構いて、いつも抽選になるほどの人気ぶりである。リージェンは出会った頃日本語を勉強しはじめたばかりであった。しかし驚いたことに、彼の日本語会話の力はどんどんと伸び、半年もすると結構私と話をすることができるようになった。面白いことに、英語を話しているときには自信たっぷりで威張った感じさえするリージェンが（MITのたいていの学生は自信満々である）、いったん日本語を話し始めると、途端に口調はもとより、動作までぺこぺここと日本人ぽくなってしまふのである。これは多分授業の進め方によるもので、まずしゃべることを第一目標とし、敬語と同時に日本の文化、習慣を徹底的に教えられるからではないかと思われる。彼らを見ていると何年も英語を習ったにもかかわらず話すことが苦手な日本人が受けてきた英語教育が、いかに使えないものかを実感してしまうのである。

テクニカルジャパニーズ

MIT ジャパンプログラムでは、毎年夏にテクニカルジャパニーズのコースを提供している。電子工学とコンピューターサイエンスのコースは7年前からあったが、マテリアルエンジニアリングのコースは2年前から設けられた。日本の研究者は英語の文献を読むことができるが、アメリカの研究者は、非常に重要な日本語の文献がたくさんあるにもかかわらず、そこからほとんど情報を得



テクニカルジャパニーズ授業風景

られずにいる。従って、近年特に日本が先行している分野に関して日本語の文献を読みたいという要求が高まってきている。日本語を話すことはそれほど文法的な制約がないため以外に簡単だが、読むことになると、特に専門的な文章では技術用語が入ってくるのでやはり難しいようである。全米でも専門誌の論文を読むというレベルの高い日本語コースはMITだけであり、全米の大学や企業から応募がある。ひょんなことから私がマテリアルのコースを担当するよう依頼され、研究の傍ら2回の夏期コースを教えることとなった。コースは2か月で週5日、私は文章読解を担当し、その後のクラスで語学の先生が文法の説明をおこなった。学生はこの他に会話クラス、講演などを取るためかなりハードのようであったが、熱心に勉強しめきめき力をつけていくのが私にもわかった。語学の専門家でない私が日本語を教えるというのはおこがましい気もしたが、私にとっては貴重な経験の一つとなった。

様々なチャンスを通し日本に関心をもつ世界各国から来た友人達に出会った。彼らにいろいろ質問されて自分がいかに日本について知識が浅いかをたびたび痛感した。しかし、専門の枠を越えいろいろな分野の人と出会えたことはボストンで得た大きな財産だと思っている。

友人達の多くは日本に來たいとチャンスを待っている。近い将来彼らと再会できることを楽しみにしている。